

機関番号：37502

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20820062

研究課題名（和文） 古代イタリアの農業立地に関する考古学・経済地理学的分析

研究課題名（英文） An Analysis of the Agricultural Locations in Ancient Italy in the Perspective of Archaeology and Economic Geography

研究代表者

池口 守（IKEGUCHI MAMORU）

別府大学・文学部・准教授

研究者番号：20469399

研究成果の概要（和文）：前2世紀～後2世紀のイタリア半島における経済活動の変化を説明するために、農産物の生産・輸送・消費の複雑な相関関係を、考古学史料や経済地理学の理論を用いて明らかにした。(i)平和時の輸送費の低下に伴う農業立地条件の変化が栽培作物の選択に決定的な影響を与えたこと、(ii)紀元1世紀以降の農業の粗放化は、通説とは異なりローマ人が食肉として豚肉よりも牛肉を主に食していたことに関連すること、以上2点を明らかにしたことが特筆すべき成果である。

研究成果の概要（英文）：The change of economic activities in Roman Italy between the second century B.C. and the second century A.D. is explained by clarifying the complicated relations between the production, the transport and the consumption of agricultural produce. Important findings: (i) the changing conditions for agricultural locations caused by the declining transport costs in the peaceful time had critical influences on the choices of crops; (ii) the transition towards extensive farming from the first century A.D. onwards is attributed to the fact that the main meat eaten by Romans was, contrary to the common belief, not pork but beef.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,320,000	396,000	1,716,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,520,000	756,000	3,276,000

研究分野：古代ローマ社会経済史

科研費の分科・細目：人文学・西洋史

キーワード：古代ローマ史、経済史、農業史、イタリア、表面踏査、動物考古学、経済地理学

1. 研究開始当初の背景

ローマ農業史の研究は近年の日本ではやや低調だが、欧米では考古学史料の増大にも刺激され活発な論争が続いている。2008年にケンブリッジ大学でPh.D.を取得した池口の学位論文 The Dynamics of Agricultural

Locations in Roman Italy は農業立地の変化のメカニズムを解明することを目的としたものであり、考古学史料を積極的に取り込み、経済地理学の理論を応用するという学際的なアプローチをとっていた。

2. 研究の目的

上記の博士論文執筆を通じて浮上した幾つかの課題に取り組むのが本研究の目的であり、表面踏査データを刷新することや、動物考古学データを活用して肉食の実態にせまること、などを具体的な目標として設定した。

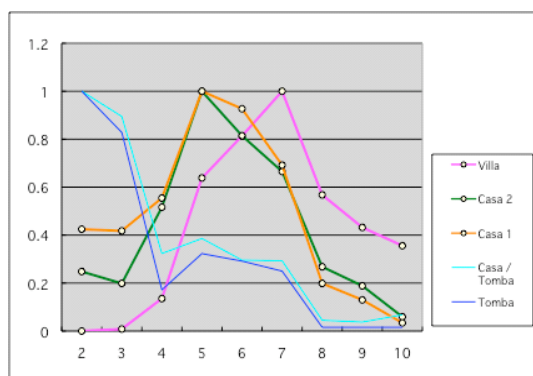
3. 研究の方法

古典考古学の文献は日本国内で入手困難なものが多いため、主にイギリスの大学図書館（ケンブリッジ大学等）やイタリアの研究機関（British School at Rome 等）で収集する方法をとった。また、学会発表や講演の依頼にも積極的に対応し、海外の研究者と議論を重ねた。

4. 研究成果

(1) 表面踏査データ

Ph.D. 論文ではイタリア内の6つの地域、すなわち、アゲル・コサーヌス、エトルリア南部、リリ川流域、ピフェルノ川流域、リエティ盆地、マッシコ山麓の表面踏査データを扱った。このうち、アゲル・コサーヌスについては近隣のアルバーニャ川流域等のデータを加えた形で A. Carandini(2002), *Paesaggi d' Etruria: Valle dell' Albegna, Valle d' Oro, Valle del Chiarone* が包括的なデータを収録しており、エトルリア南部については British School at Rome の The Tiber Valley Project によって再調査が進められていて、すでに H. Patterson and F. Coarelli(2008), *Mercator Placidissimus. The Tiber Valley in Antiquity* などで成果が発表されてきている。本研究ではこれらのデータを取り込むことによってデータの刷新を行った。



グラフ 1

グラフ 1 は Carandini 前掲書のデータをグラフ化したもので、横軸に時間（6～7が後1世紀から2世紀にあたる）、縦軸に農村の

遺跡数（遺跡数の最大値を1として残りを小数で表示）をとり、建築物の規模別に遺跡数を表示している。最大規模の villa クラスが増加する後1, 2世紀に、中小規模の家屋である Casa 1, Casa 2 のクラスは減少しているため、土地の吸収を通じてラティフンディウムが拡大する様子が確認できる。

これらのデータ刷新の成果は、2008 年秋にイタリアのカプリで *L' impatto della peste antonina* と題して開催された学会での報告 *The Impact of the Antonine Plague on the Italian Countryside* において発表した。この学会はマルクス・アウレリウス帝の治世に起こった疫病が社会とりわけ人口にどの程度の影響を与えたかをテーマにしたもので、池口は表面踏査データから人口の変化を推定する上での基本的な問題点と解決策を提示することによって貢献した。

なお、表面踏査データが当該地域の農業の全般的な推移を明らかにするのに対して、発掘データは特定の遺跡の詳細な情報を与えるものであり、両者は相補的な関係にある。本研究では両者をいかに効果的に組み合わせるのかについても考察を深めたが、その関連で、ワインやオリーブオイルの製造に使われたドーリウム（甕）についても調査の必要に迫られた。その研究成果の一部は、近刊予定の R. Bagnal, et. al., *The Encyclopedia of Ancient History* の *dolium* の項に執筆した。

(2) 経済地理学理論の応用

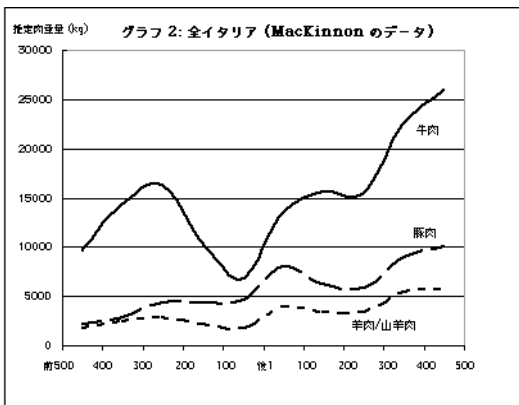
本研究の特徴のひとつは、古代経済の研究に現代の経済地理学の理論を応用する点である。これには古代の経済と現代の経済の間でどの程度まで類推が可能かという問題、すなわちモダニスト（類推を認める立場）とプリミティビスト（認めない立場）の間の論争との関連がある。池口は類推可能な点に関心を払う点でモダニストの立場に近いが、経済学・地理学の理論を古代経済に応用する上で、応用のための条件を確認しておく必要があった。工業国と農業国との貿易をモデルとして設定する貿易理論は、本質的には資本集約型産業に比較優位をもつ国と労働集約型産業に比較優位をもつ国との間の貿易を想定しているが、古代経済に関して集約農業と粗放農業との間で比較優位を想定するならば、現代の貿易理論は大幅な修正を加えることなく古代にも応用可能である。以上を確認した上で、経済学者ポール・クルーグマンのU字理論（輸送費の低下にしたがって最初は産業が中心に集積するが、その後、周辺への分散に転じるというもの）を用いて、ワイン生産が共和政末期にイタリアで発展し、その後、属州に生産地が拡散していくメカニズムを説明した。この成果は、オランダのライデン大学で行った講演 *The Dynamics of*

Agricultural Locations in Roman Italy の中で発表した。

(3) 動物考古学のデータ

本研究の最大の成果は、これまで欧米でも十分に活用されてこなかった動物考古学のデータを、分析方法に慎重な検討を重ねつつ積極的に利用し、ローマ農業史の常識とは大いに異なる畜産業の実態を解明したことである。

ローマ人の食肉は主に豚肉だったというのが通説だが、これは上流階級の食生活を反映したにすぎないアピキウスの料理書など、限られた文献史料をもとに築かれたものである。したがって下層民衆の食生活については再考の余地があると言わねばならない。M. MacKinnon(2004), *Production and Consumption of Animals in Roman Italy* で発表されたイタリアの動物考古学データでは NISP (同定破片数) と MNI (最小個体数) が示されており、両者を合わせて時系列で畜産の盛衰を確認することができる。



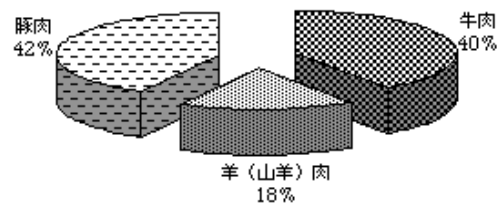
グラフ 2

グラフ 2 はこのデータを用いて各食肉の消費量を動物の種類別にグラフ化したものだが、全時代を通じて牛肉の消費量は豚肉や羊肉・山羊肉の消費量を圧倒しており、これは豚肉の消費量を重視する通説に変更を迫るものである。

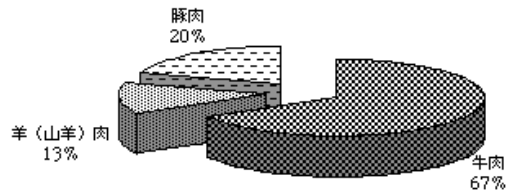
この結果を受けて、従来の通説が依拠する文献史料 (カトー、ワロー、コルメラ、プリニウス、ガレノス等) を読み直したところ、ローマ人は必ずしも牛肉を嫌ってはならず、特に子牛肉の場合はむしろ好んで食されたことが明らかとなった。したがってローマ人が敬遠したのは老牛肉だったと考えられる。このことはローマ世界において牛が多目的に利用される動物だったことと密接に関連している。役畜や乳牛として長年使用された牛は、年老いて使用に耐えなくなると屠殺され食されたと考えられるが、その肉は堅く、

食用としては質の低いものであった。したがって上流階級には不人気だったが、摂取カロリーの大部分を穀物に頼らなければならない下層民衆にとっては貴重なタンパク源であったと考えられる。後 301 年に発布されたディオクレティアヌス帝の最高価格令によれば、牛肉の価格は 1 ポンドあたり 8 デナリウスであり、12 デナリウスの豚肉に比べて安価で購入しやすいものであった。

このような社会階層と食肉の種類の間関係を考えるとき、考古学的には遺跡の種類と出土する骨の対応を考えることになる。



グラフ 3 (ウィラ遺跡の食肉)



グラフ 4 (村遺跡の食肉)

グラフ 3、グラフ 4 はそれぞれ、マッキノンによってウィラ、村に分類された遺跡における食肉の消費量について、動物ごとに占有率を表示したものである。ウィラは富裕者の別荘である一方、村には主に下層民衆が居住したと思われるので、前者より後方で牛肉の消費量が多いことは、牛肉が「貧者の肉」であったことを傍証している。ディオクレティアヌス帝の最高価格令は 4 世紀初頭の帝国東部における相対的な物価を示すにすぎないものの、ここには労働者の賃金も列挙されており、これと食肉の価格を比較すれば、食肉がどの程度購入可能なものだったかを推測できる。賃金の平均は日当約 46 デナリウスであるから、平均的な労働者でも一定量 (おそらく週に 2 ポンド程度) の牛肉を購入することが可能だったであろう。

牛肉がローマ人の主たる食肉であったことは、ローマ農業史の常識を覆すものであり、今後の農業史研究に与える影響は大きい。従来、放牧地は主に羊や山羊のためのものと考えられていたのだが、これに牛が加わることになり、牛肉の消費量の増減が放牧地のみに

らず牧草地の拡大・縮小に繋がる意味で、イタリアの土地利用に与えた影響は甚大だったと考えられるからである。2010年5月に刊行された桜井万里子・師尾晶子編『古代地中海のダイナミズム』所収の論文「古代イタリアにおける肉食の実態と変容－牛肉の生産と消費を中心に－」でこの成果を発表したが、今後、海外の研究雑誌に投稿を予定しているほか、(1)、(2)の研究成果も含めて英語での単著の刊行を計画している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 池口 守「古代イタリアにおける肉食の実態と変容－牛肉の生産と消費を中心に－」(桜井万里子・師尾晶子編『古代地中海世界のダイナミズム』、山川出版社、2010、136－153)

[学会発表] (計3件)

- ① M. Ikeguchi, ‘Zooarchaeology and Meat Consumption in Roman Italy’ (The Second Euro-Japanese Colloquium of the Ancient Mediterranean World: Social Norms and Public Sphere, University of Tokyo, 29th March, 2009).
- ② M. Ikeguchi, ‘The Dynamics of Agricultural Locations in Roman Italy’ (Mare Nostrum Seminar, University of Leiden, 10th March, 2009).
- ③ M. Ikeguchi, ‘The Impact of the Antonine Plague on the Italian Countryside’ (L’impatto della “peste antonina”, Anacapri, 10th October, 2008).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池口 守 (IKEGUCHI MAMORU)
別府大学・文学部・准教授
研究者番号：20469399

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：